


 巻頭言

変革は始まっている

藤 林 信 也

本会総務担当理事 NEC 情報システムズ



昨年 5 月より情報処理学会の総務担当理事として学会運営に参画し、身近にその諸活動を眺め、考える機会を得ました。第一印象は、学会は変わろうとしているということです。

景気の先行きが不透明な中、ネットワーク新社会に向けた当学会が関連する分野は、21 世紀に向け飛躍を続けると予測され、当学会の先導的役割と期待も大きくなっています。しかし、平成 8 年の国内パソコン出荷台数が、前年比 32.7% 増の 757 万台(データクエスト社調べ)にまで伸び、情報活用の大衆化がますます進む中、メインフレームを中心とし、専門家が情報化のあらゆる領域に関与していた学会創設期と、今の学会への期待がまるで別世界のものになっているという声も耳にします。また、技術革新のスピードが速く、変化の激しい時代になり、学会もこのスピードに対応した変革を求められています。

この期待と対応のずれは、たとえば、最近数年の会員数や全国大会への産業界からの参加者数の漸減傾向としてみるすることができます。会員数についていえば、平成 4 年 2 月の 32,605 人をピークに、最近では 6 年度末 30,844 人、7 年度末 29,853 人と漸減し、8 年度末は 29,000 人と見込まれています。

これに対して学会では、平成 3 年以降をみても、学会運営企画委員会、部会制検討委員会、学会活動活性化委員会による対応策の検討と改善が年々図られ、今年度も将来ビジョン検討委員会や研究会将来ビジョン調査委員会を設けて、変革への検討が継続されています。その結果、学会の諸活動もこの数年、具体的にいくつか新しい試みを実施され、変わりつつあることも事実です。

たとえば、学会誌にみられる「情報処理最前線」のようなホットな話題の「特別論説」記事やシステム構築事例の紹介記事、あるいは、中堅 SE を主たる対象にした実務家向け「連続セミナー」など、評判のよい企画が始まっています。また、研究会主催による活発なシンポジウムやワークショ

ップの企画開催が多くなり、研究者、教育者と実務家の活発な交流の場が展開されています。さらに、最近発行された情報処理に関する「倫理綱領調査委員会報告書」は、我が国ではまだ類書のない資料として各界での活用が期待されます。

このような変革の兆しがあっても、会員数の漸減傾向はまだ続いています。とくに、会員の 7 割を占める産業界会員に対し、より身近な学会、役立つ学会としての役割を今以上に果たすべきではないでしょうか。学会誌の特集テーマなどに連動したセミナー企画や、情報処理フロンティアシリーズのような比較的新しい技術の体系的な解説の出版事業などは、技術者の継続的な育成を必要とする産業界にとって歓迎されるものでしょう。また、これらの活動は、学会にとっても財務基盤強化につながり、より意欲的な活動の源泉になります。

現在、年 2 回開催されている全国大会は、研究、教育、産業界の交流の場として重要ですが、従来からの大学生や企業新人など、若手発表の場としての役割は支部大会に任せ、その中で優秀講演、論文の選抜、表彰を行い、この学術、技術領域へ新会員を誘う。ここで選抜された優秀論文と数を絞った査読論文、あるいは招待講演による年 1 回の全国大会に変身する。さらに、チュートリアル、ワークショップ、パネルなどを併催し産業界会員の参加を誘うという改革案はどうでしょう。

拙文に目を止めていただいた会員諸兄諸姉は別として、一度学会に魅力を感じなくなって学会誌すら十分目を通さず離れていく会員に、この変革の兆しを気づかせる努力、変化が目立つような工夫、学会からの情報発信の強化がより一層必要ですが、合わせて会員からの声、会員の学会活動への積極的な参画をもっと求めたい。このためにも我がコミュニティは、大いにインターネットを活用し、ネットワーク新社会に向けた先導的な動きを示そうではありませんか。

(平成 9 年 3 月 11 日)